

梁山丁の創作活動と「満洲文壇」

李

青

一 はじめに

一九三一年に勃発した九・一八事変（日本では満洲事変と称する）以後、日本は中国の東北三省に対する侵略を本格的に開始した。翌年、傀儡政府の「満洲国」を成立させ、一四年間にわたって東北三省を植民地統治下に置いた。

こうした情勢下で、「満洲文壇」は以前にも増して複雑な状況を呈していく。本稿は、当時「満洲文壇」で活動した中国人作家、梁山丁と関わりの深い二回の文芸論争を軸にしつつ、中国人文学者による「満洲文壇」の一側面を明らかにしていく試みである。なお、中国では「満洲文学」のことを「東北淪陷期文学」と称している。

15 (李) まずは梁山丁について略説しておこう。梁山丁は遼寧省

開元県に生まれた。本名は梁夢庚、原名は鄧立。ペンネームには、山丁をはじめ、善人、氷菲、善などがある。「満洲時代」に「山丁」という名前が多くつかわれたため、梁山丁以外に「山丁」とも言う。高校時代に、恩師の指導の下に魯迅、郭沫若、茅盾などの文学作品に触れるようになる。このときから文学創作をはじめた。

梁山丁は少年時代を異国の占領下という特殊な環境の下で過ごした。このような社会環境がかれの文学創作に大きな影響をおよぼしたと考えられる。

代表作には、短編小説集『山風』（新京文叢刊会・一九四〇年）、詩集『季季草』（詩季社・一九四二年）、長編小説『緑の谷』（長春文化社・一九四三年）などがある。

梁山丁文学の作風は、東北の風土、貧しい人々の生き様

を豪放な筆致で巧みに表現するところにある。梁山丁は終始、「表現を暴露」し、「郷土を描く」ことで、己の創作精神を貫いてきた。長編小説『緑の谷』の発表は、「現実の暴露」による梁山丁独自の「郷土文学」の地位を固める契機となった。

梁山丁は、「満洲」時代に北京への逃避行を経験し、一九四九年以降の共産党政権下でも波乱の人生を送ってきた。一九五八年の反右派運動と六六年からのプロレタリア文化大革命などの一連の政治運動に巻き込まれ、理不尽な批判を受け続け、二二年間もの囚人生活を余儀なくされた。文学創作活動も当然、長い歳月にわたって中断させられた。一九七九年、六五歳の梁山丁はようやく名誉を回復された。

梁山丁は再び文壇にもどることができた。八〇年代の初頭、「東北淪陥期の文学」に対する再評価の動きが見られるようになる。「漢奸文人」、「漢奸文学」という評価を本格的に見直す作業が行われた。

この間、山丁は休むことなく、「満洲文学」の整理と研究に没頭した。

山丁主編の『東北文学研究』（計七輯）には多くの資料や回想録と「満洲時代」の小説が発表され、「満洲文学」

研究者に貴重な資料を提供してくれた。

このほかに、女性作家小説集『長夜螢火』（一九八六年・春風文芸出版社）と男性作家小説集『烛心集』（一九八九年・春風文芸出版社）を、『東北淪陥期作品系列叢書』（計二冊）としてまとめた。さらに、文壇回想録『東北作家史話』、『東北作家群像』、『文壇交遊録』も執筆した。一九九七年七月二四日、山丁の八三年の波乱の人生に幕が下ろされた。

二 「郷土文学」論争

九・一八事変以後、日中両国間では一触即発の緊張状態が続いた。一九三六年一二月に抗日をめぐって、張学良、楊虎城は西安に蒋介石を監禁、諸党派一致による抗日救国を全国に呼びかけた。いわゆる、西安事変である。一九三七年七月七日には盧溝橋事件が発生し、日中全面戦争がはじまった。

「満洲国」でも、日中関係の悪化による言論引き締めが一層厳しくなった。盧溝橋事件の直後、一九三七年「満洲国」弘報協会は、新聞統治政策に則り、多くの新聞を停刊させた。くわえて、相当数の娯楽的な文芸雑誌も休刊に追いこまれた。

まさに惨憺たる「満洲文壇」に雑誌『明明』が創刊された。『明明』の誕生は「満洲文壇」に新しい活気をもたらした。

『明明』は一九三七年三月に日本人の城島舟礼、稲川朝二路の働きかけと資金援助で創刊された。主要執筆メンバーには、古丁、小松、疑遲、辛嘉（毛利）、外文などがいた。

『明明』に参加した古丁、疑遲、外文はもともと知古の文学愛好者だった。『明明』が誕生する以前に、三人で「芸術研究会」を発足させていた。研究会を開始するにあたって、古丁は次のような文章を起草している^①。

われわれは苦悶している。当然、それぞれの苦悶には、それぞれの特殊な出発点があるはずだ。口を持っているにもかかわらず、われわれは「おし」か「どもり」と同じだ。目があるにもかかわらず、われわれはいつも「めくら」と同じだ。「めくら」でなければ、近視か老眼だ。耳があるにもかかわらず、われわれは「つんば」と同じだ。われわれは健全な官能（五感）を持った「不具」だ。

われわれはみな聡明だ。呐喊の内に生を求めなければ、沈黙のなかで死ぬしかない知っているからだ。

タバコや酒や女―われわれはそれらのなかで自らを滅ぼしている。風花や雪日―われわれはそれらのなかで麻痺させられている。われわれの生命はそんなにも無用なものなのだろうか。

われわれは苦悶している。われわれは苦悶を延長するのではなく、昇華すべきだ。

科学的な芸術理論は「苦悶の昇華は芸術である」とことを肯定してはいないが、われわれは苦悶の昇華を芸術とする。

苦悶し、悩み迷っている青年たちの心情が浮き彫りにされている。

たまたま『月刊満洲』の社長城島舟礼が、政府弘報処から中国語の大衆雑誌を編集、発行するという話があったので、三人の青年は「今度こそ、われわれが磨いてきた才能を活かす場所ができた」と喜んだのだった。

『明明』は創刊後にさっそく独自の編集方針を定めた。

主要メンバーの古丁は、こう語っている。「満洲文学は満洲人独自の理論を有していない。有しているのは、ただ『書く』ことと『印刷』することである。われわれはこれ

を『写印主義』という。何を書くか、どのように書くかについては、作品ができてからのことであろう。重要なのは、

まず作品を書きあげることだ。要するに、われわれはまだ作品がなく、一からスタートしなければならぬのである。こうした心境は少なくとも満洲人文学者たちに同一ものだろう^②と。また『潭・争牛』のなかで、「文芸団体は文芸以外のいかなるもののためにつくられたのではない」とも述べている。

このほかに、「方向なき方向」を堅持することも打ち出した。作品を多く書き、多く印刷することによって、「満洲文壇」を繁栄させようと考えていたわけである。

草創期の『明明』からは、数多くの特色ある作品が誕生した。五月号に疑漣が北満の林業労働者の苦しい生活を描いた『山丁花』を発表した。生活にかすかな希望を持った一群の労働者たちは、厳しい冬の季節に伐採する。あらゆる苦しみに耐え、必死に働いても、帰省する金以外、ほとんどを搾取されてしまい、手元には何も残ることはない。作品は「満洲国」の下層社会の労働者たちを切々とした筆致で描きだしている。読者には、北国の豪放で飾り気のない生き様を感じさせる。これを読んだ山丁は、『明明』七月号に「郷土文学と『山丁花』^③」と題する評論を載せ、疑漣の『山丁花』を称賛したのである。

山丁は「われわれの国土の文壇においては、郷土文芸に

重点を置くべきである。時間と空間にもかかわらず、文芸作品の表現する意識および創作技巧はいずれも現実を重要視しなければならない。：(中略)：『山丁花』に表現された意識および創作技巧が郷土文学の代表であることは否定できない」と述べ、疑漣のことを「勇敢なる郷土文学を試みた作家で、満洲文壇の開拓者である」と高く評価した。しかしながら、山丁のこの評論は思わぬ論争を巻きおこしたのだった。「郷土文芸」をめぐって、『明明』派と山丁および山丁支持派との間で、一年におよぶ論争が繰り広げられたのである。

古丁を代表とする『明明』派は、山丁の提唱した「郷土文学」に反発した。古丁は『偶感偶記ならびに余談』^④のなかで、「史之子」のペンネームで、「郷土文芸」は一説では『百科大事典』からでたもので、一説ではその土地の財産にすぎないと言われている。あくまでも、あれは美しいスローガンであることは疑いない。：(中略)：わたしは文学が偏狭なものではなく、小さな天地にこだわるべきではないと思う。「郷土文芸」に「根拠」があるならば、それはただの「大豆高粱」のようなものを玉の壺に差しこんだような、美しい飾りにすぎない」と批判した。それに續けて、「われわれは相変わらず『方向なき方向』を堅持し、

「主義」とか「色彩」とかを信じない」、「われわれは地道に書いたり印刷したりする点において共通意識をもっている」と強調したのである。

この論争は一九三八年の『明明』停刊をもって一応の終息をみる。だが、双方は自説を譲歩させず、「満洲文壇」に意味深いものをもたらした。

このように、「郷土文芸」論争の尾をひきずつたことから、「満洲文壇」には創作精神の違いから次第に派閥が形成されていくことになる。

三 「写与印」と「真実の描写」、「真実の暴露」論争

一九三八年九月の『明明』の停刊から、『明明』派の同人たちは翌年の八月に詩歌刊行会を成立させ、『詩歌叢刊』を出版した。それから芸文志事務会を成立させ、一〇月には大型文芸雑誌『芸文志』を創刊した。『明明』派はここから『芸文志』派と呼ばれるようになる。『芸文志』派は『芸文志』創刊にあたって、創刊号の『芸文志・序』^⑤で自らの主張を一層明確化させた。

芸文とは、書くことと印刷することにある。書くことでは天地の大きさ、ゴマ粒の小ささを拒まない。真意があれば（作品は）永久に伝わる。印刷することでは

は海の大きさ、粟の細かさを拒まない。良いものが書ければ、永久に残るだろう。

『芸文志』派の形成に対抗して、一九三九年一月に山丁、呉郎らは、新京（現在の長春）で文叢刊行会を成立させた。同人には、山丁、呉郎のほか、呉瑛、金音、梅娘、戈禾、楊葉、堅矢などがいた。芸文刊行会は『芸叢刊』を編集し、呉瑛の『両極』、山丁の『山風』、梅娘の『第二代』、秋蛩の『去故集』を出版した。と同時に、瀋陽で秋蛩、陳因などが文選刊行会を成立させた。主要メンバーには、孟素、袁犀、李喬、田琳、李妹などがいた。文選刊行会は文学季刊誌『文選』を刊行した。秋蛩はこのほかにも『毎日叢編』を創刊し、『文最』と『文穎』も誕生させた。二派の主張と創作精神が同様だったため、文学史上この二派のことをひとまとめにして「文選」派と呼んでいる。前回の「郷土文学」に関する論争は、いったん終息をみせたものの、両陣営が各自の文壇における陣地を固め、やがて論争が再燃した。

山丁は『大同報』の『芸文專頁』、発刊の前書き「前夜」^⑥で、「われわれは自分および多くの間諜（スパイ）たちの前で、もつとも困難な問題もちださなければならぬ。それは真実の描写と真実の暴露である」と述べて、リアリ

ズムの創作方法を提唱した。『芸文志』派と『文選』派が対立している真つ最中の「間諜」という梁山丁の表現は、日本人と親しく、しかも日本人の経済援助を受けている『芸文志』派のことを指していると言える。

これに対して、文芸刊行会と文選刊行会は南北呼応し、互いに応援しあつた。秋螢も『文選』の創刊号（文選刊行会・一九三九年）に「現段階の文学は超時代の芸術と個人主義の愚痴をこぼすことではなくなつた。現在の文学は現実を認識する道具でもある。われわれは現実から逃れてはいけない。具体的な実践のなかで、生命力のあるものをつくるべきだ」と記した。かれは文学の現実性と時代性、文学の遺産継承、文学集団の力量から、『芸文志』派が「写印主義」に基づき、むやみに大量の作品をだしたからといって、眼中に自派のほかには何者もないような態度は傲慢きわまりないと批判した。

文選刊行会の同人顧盈も『文最』に「写印主義」^⑦と題する一文を寄稿して、『芸文志』派同人と「写印主義」を批判した。顧盈は「芸文志の同人たちは、ライフスタイルが変わると同時に、読者から遠のいた」と述べた。というのは、『芸文志』派同人の多くは「満洲国」政府機関に就職し、同人雑誌も「満洲国」政府に公認されていたからであ

る。かれらの文学は為政者の統制下に置かれ、文学の質が変わつたことを暗に批判しているのである。情熱に満ち溢れていた『明明』時代と比較すれば、戦う精神が欠けており、かれらは文人の「長衫」を身にまとい、「悠閑風雅」を書き、「自己満足」しており、こうした創作態度は、ただ自分たちのために「記念碑をつくる」だけであると指摘した。

しかし、『芸文志』派は他派の批判にもかかわらず、「方向なき方向」と「写印主義」の旗印を降ろすことはなかつた。

当時、山丁をはじめとする『文選』派は「写与印」に対して、「熱与力」の創作姿勢を打ちだした。山丁は『大同報』副刊の「文学專頁」の前書き、「前夜」^⑧で、「われわれはふんばつて多くの食料を生産せねばならない。良心的でさえあれば、粗野であろうとも、整つていなくてもいい。あれら貧しく、飢えた大衆たちに提供するのだ」と述べている。

「写与印」と「熱与力」の二つの創作の方向性は再度「満洲文壇」に活気をもたらした。李季瘋は「關於批評」^⑨のなかで「写与印」を以下のように批判している。

われわれは「方向ある方向」を要求（むしろ、必要

不可欠と言ってよい) しており、「方向なき方向」など求めてなどいない。「方向なき方向」は盲動にすぎないとわれわれは認識している。方向が見つからなければ見つかるべきだ。方向が見つければ前進すべきだ。方向を見つかることも前進することもできなければ、読者に否定される羽目になるのだ。

こうした論争を繰り返しながら、双方は活発な出版活動をもせた。はた目には、競争に転じたのではないかと思えるほどだった。

一九四〇年に『芸文志』派は『読書人連叢』を刊行、『読書人』、『文学人』、『評論人』、『詩歌人』を世にだした。一方、『文選』派の秋蛸は『毎月叢編』を刊行、『文最』、『文穎』を出版した。秋蛸は『文最』の創刊号(一九四〇年)で、「現実の文芸は読者のために気晴らしをするものでもないし、作者が誰かに媚びることも許されるものではない。:(中略):今日の文壇を見渡しても、正直で健全な者が必要だ。一部の者は姑息な手段を用いて、文壇で地位を買った。したいことをし放題できても、目の鋭い読者はある人たちの虚名に酔うことはない」と日本の勢力を頼りに創作活動をする『芸文志』派に非難の矛先を向けた。

『芸文志』派は『文選』派の批判にもかかわらず、「写

印主義」を最優先にして、一九四〇年に「城島文庫」を創刊した。そこには、古丁の『奮飛』、『一知半解』、小松の『蝙蝠』、疑遅の『花月集』、爵青の『群象』、石軍の『暴風雨』、外文の詩集『詩七首』などが含まれている。山丁が組織した「文叢刊行会」も『文芸叢刊』を刊行しはじめた。呉瑛の『両極』、山丁の『山風』、梅娘の『第二代』、秋蛸の『去故集』がそうである。

一九四〇年に『芸文志』は第三期をもって停刊した。このあと古丁は「芸文書房」を創立し、「駱駝文学叢書」シリーズをだした。爵青の『歐陽家の人々』、『帰郷』、小松の『人と人々』、『野葡萄』、疑遅の『天雲集』、『同心結』、古丁の『竹林』、『譚』(雑文集)などである。

第二回目の『芸文志』派の「写与印」と『文選』派の「熱与力」(真実描写)論争は、一九四〇年によりやく終止符が打たれた。では、両派を反目させた大きな原因は何だったのだろうか。

在満日本人翻訳家の大内隆雄は古丁の『原野』(一九三八年)、『平沙』(一九四〇年)を日本語に訳したばかりでなく、一九三九、四〇年に『満洲作家小説集』一、二を日本語に訳し、日本の読者に紹介した。ほとんどが『芸文志』派の作品だった。そもそも『芸文志』派の創作活動は

日本人の援助に依存していたこともあり、日本人との接近は対立する『文選』派から批判をかった。

『芸文志』派メンバーの大部分は日本語に堪能だったので、日本の文学作品をはじめ、ロシア文学や世界文学の紹介にも精をだした。古丁は雑文集『譚』^⑩で、はっきりと「(質・量ともに) 活発で、豊富な世界文学の紹介がなければ、(質・量ともに) 活発で、豊富な地元文学の誕生は考えられない」と述べている。これは古丁および『芸文志』派が「郷土文学」に反対した大きな理由の一つと考えられる。

以上の二回の文芸論争は、「満洲文壇」にとつて、大変意義深い。創作に着目するならば、第一回目の「郷土文学」をめぐる論争の結果、多くの同人誌や中、長編小説が誕生した。これは否定できない事実である。

山丁が提唱した「郷土文学」の理念は、当時の東北の被占領という特殊な環境からみても、日本人が推進した「移植文学」に対する抵抗という意味からも、かなり過激で、進歩的な意味合いをもっていたと言える。

しかしながら、淪陷期文学の大家である馮為群、李春燕両氏は「郷土文学」を高く評価する一方、以下のような指摘をしている。^⑪

「郷土文学」は人々の意識のなかでは単なる民族風格および郷土特色のある文学をつくるためのスローガンだと理解している。その内容は日本に侵略、蹂躪されている東北の大地のことを想像するにはいたらぬ。ゆえに、この文学のスローガンには限界がある。

第二回目の「写印主義」、「方向なき方向」と「真実の暴露」との論争は、幾多の作品の出版をうながし、文壇に空前の繁栄と発展をもたらした。これもまた否定できない事実である。

呉郎は当時の『華文大阪毎日』^⑫に、「書くことと印刷すること」と『熱と力』！という二つのスローガンは実際に前者の満洲文芸方向の論争（「郷土文学」論争を指す―著者注）に取って代わったばかりでなく、文学青年の創作意欲をあおりたてた。今日の文壇を見渡すときに、この二つのスローガンによってもたらされた功績を感ぜずにはいられない」と論評している。

論争によって、各派の文学理論が高まったばかりでなく、質の高い文学作品が誕生した。たとえば、東北の「郷土文学」の代表作と評価された『緑の谷』は、論争の真つ最中に誕生した。そして、文壇論争によって、梁山丁を代表とする「郷土文学」が形成され、文壇を成熟させたのである。

四 東北「郷土文学」の特徴

東北の「郷土文学」は梁山丁によって、はじめて打ちだされた。かれ自身は、東北の「郷土文学」をこう定義している。「わたしはあらゆる現実生活をリアルに暴露する作品、地方的色彩の濃い作品、東北人民を描く作品をすべて郷土文学と言う」と。また、東北「郷土文学」の特徴について以下のように明言している。

東北淪陥期の郷土文学と魯迅先生の言っている郷土文学、また茅盾の言っている郷土文学から、現代作家劉紹棠の書いている郷土文学との関係で、それらには共通の特色があるものの、それぞれに特色がある。なかでも東北淪陥期の郷土文学は特別だった。それは岩石を抱くような重圧下にあつて、闘争、反抗し、生存を求めた文学だった。それは、ありとあらゆる方法を用いた。つまり文学による技巧、あるいは土地の言葉や方言を使い、さらには濃密な地方色を取り入れ、日本帝国主義を欺き、検閲当局を騙し、生存の目的を達成しなければならなかったのだ。

いみじくも梁山丁が述べたように、東北の「郷土文学」は東北の他民族による侵略という特殊な環境から生まれた

ものなのである。それは、反現実主義の粉飾文学に対する反抗だった。そもそも梁山丁を中心とする「郷土文学」の提唱者は、文学の生命力とは人生を直視し、郷土に根付くところにあると認識していた。ところが、故郷が外敵にさらされたときに、人々の故郷への愛着を呼び戻すことによつて、人々の民族意識と愛国心を強化するために、かれらは迷わずに、現実主義を十分に反映することのできる「郷土文学」を選択したと考えられる。

孫中田氏は東北「郷土文学」について、「もしも魯迅が提唱した郷土文学が現実根付いて、文学の風格と色彩が富んでいると言うならば、東北淪陥期に形成された郷土文学は、被占領中における責任感と参与意識（から生まれたもの）だと言つてよい」と分析している。

「満洲国」建国後に、反満抗日の文学に対する弾圧は日増しに厳しくなつていく。そうしたさなかの一九三三年、梁山丁は哈爾濱で当時文壇で進歩的な文学青年であり、また親友でもあつた蕭軍と会つた。新聞の副刊への取り締まりが厳しくなるといふ現実を前にして、「単行本を出版することと東北の郷土の現実を中心に現実社会の暗黒面を暴露する」ことについて話し合つた。

ここからもわかるように、梁山丁の「郷土文学」の誕生

はけつして偶然ではなかった。かれは文壇に足を踏み入れたときから、北満の革命文芸の影響を受けていた。特に、ロシア文学をむさぼり読んでいた。のちに梁山丁は、「わたしは一九世紀のロシア文学が好きだ。批判的リアリズムの作品やトルストイ、チエーホフ、プーシキンの作品を教科書のように愛読していた」と回想している。かれが提唱した「郷土文学」にはロシア語とのかかわりもみられる。

「ロシア語のなかでは「郷土」は「祖国」と同じ単語なので、われわれの郷土文学は愛国主義文学と言つてよい」と自ら解釈している。確かに、山丁は読んでいたロシア文学のなかでは最下層の人々を描いた作品に共鳴している。占領された東北の大地に生きている農民たちは、これらの作品に描かれた悲惨な現実とあまりにも酷似していたからだった。

山丁が「郷土文学」を唱えたのは、日本人が主体となっていた「移植文学」へ矛先を向けていたとも言える。かれは「東北の郷土文芸」で、「わたしは郷土文芸を唱えたのは蕭軍との約束の実践であり、日本人が主張している移植文学に対抗するためである。あらゆる現実の生活を暴露する作品はすべて郷土文芸だ」と述べていることから明白である。

当時の「満洲文壇」で活躍していた文人大谷健夫は「郷土文学」に対して、否定的な態度をとっていた。かれは『土地と文学』に、次のように記している。²⁰

国民文学が形成されると、郷土文学はより低い段階に踏み止まるのを原則とする。植民地、殊に満洲における日本の移植文学は、日本の国民文学の満洲への進出である。

ここで山丁の郷土文学は鮮烈な時代感と現実性が感じられる。郷土というのは作者のふるさとのことではなく、広く東北全体を指す。また、郷土についての創作は、単なる農村やちいさな町に限定されるのではなく、広く現実を描写し、現実を暴露し、現実の社会でもがく下層社会の姿を描きだすことであつた。

しかし、前にも述べたが、「郷土文学」の提唱は当時の厳しい政治情勢により、不確定な概念にとどまっていた。山丁自身も「現実描写」のなかの「現実」を具体的に解釈したことはない。むしろ、解釈できなかったのだ。ゆえに、創作過程においては、かなりの限界がみられるのである。

「郷土文学」の発展はけつして順風満帆というわけにはいかなかった。日中間の政治的な軋轢は、文壇に常に黒い陰を落とすとした。特に、一九四一年、満洲国弘報処が頒布し

た『芸文指導要綱』は、「郷土文学」をはじめとする一連の文学論争でしばらくにぎわいをみせていた「満洲文壇」を恐怖に陥れた。文筆活動家や文学者たちは一層窮地に追い込まれた。

この時期の小説のほとんどは、隱喩、暗示、象徴などの手法を用い、真意を巧みに隠すようにしていた。たとえば、疑心の有名な小説集『天雲集』は、東北方言を用いて、東北の荒涼たる原野の風景を描いている。密林での獵師やきこりの苦しい生活を表現している。人物描写には人々のうめき声や、もがき苦しんでいる姿が多く、作品は終始暗く、憂鬱な雰囲気包まれている。

梁山丁の長編小説『緑の谷』もこうした困難な時期に誕生した。後に東北淪陷期の「郷土文学」の代表作として、高く評価された。

以下、山丁をはじめとする「郷土文学」の特徴を分析してみたい。

1. 郷土に対する感情と民族感情との融和

自分の故郷が異民族に占領されてから、自分の生まれ育った故郷に一層強烈な愛情が湧いてくる。かれらは自分の故郷の頹廢と没落を感じ取るとともに、この土地で異民族

の支配下に置かれた貧しい人々に同情の念を抱く。深い郷愁に織り込まれた奥深い感情に、民族の運命に対する憂慮があふれている。

山丁の小説『孿生』（双子）がその好例である。この作品は抗日ゲリラを防ぐために、強制的に村を合併する話である。四〇年も三峽屯に暮らしてきた老九婆さん一家は、無理矢理、一五キロも離れた指定された場所に移住させられた。おかげで、老九爺さんは憤死してしまう。「畑をほつとくわけにはいかない」とわが家が恋しくなった一人っ子の鉄柱は、こっそり家にもどって、簡易小屋をつくる。そして、再び農業に従事しようと思ったところ、鉄柱は捕らえられて、連行されてしまう。残された老九婆さんと鉄柱の妻子も貧困のなかで、静かに世を去ってしまった。小屋は何者かに放火され、すべては炎とともに、煙と化した。故郷を愛する老九婆さん一家の家を失った悲しみと怒りを通じて、占領下における切なる郷愁と人々の貧しい暮らしが如実に描かれている。

2. 風土、民俗の描写と民族の性格の発掘との結合（民族の性格に対する反省）

東北「郷土文学」の風土、民俗の描写ははっきりとした

現代意識をもっている。作家はその土地のおくれた風俗、しきたりを通じて、民族性に根付いた醜いものを描きだす。帝国主義の侵略や封建主義の罪悪を暴露する。このような風俗と民族の描写は、人々の運命と結びついている。

『緑の谷』に次のような話がある。

下次の于七爺さんの一人息子于得水は、林家の若旦那（あだ名は混江龍）の林同栄とけんかした。ある日、于得水が脱穀所の番をしていたときに、火災にあう。火はまる一日燃え続けた。村の巫女は、于得水が西山の頂にいる胡仙様の子孫に傷を負わせたからだと言う。これを聞いた于得水は病に倒れてしまう。そこでやむをえず、巫女にお祓いに来てもらった。巫女は林同栄と目で合図しあいながら、木魚をたたいて「こわいよ！林家の龍がこわい！こわくないよ！魚（于と同音）なんかはこわくない！」と唱えた。やがて、于得水は死んでしまった。人々は死者の父親も含めて、「龍は災いをなくす」と信じ、かえって、林同栄に敬意を払うようになった。

この描写は、郷民の無知、愚昧を描いているが、巫女の行為を通じて、ことの結末の原因はどこにあるのかを、暗に指示しているのである。

3. 審美の追求と民族精神の高揚との結合

東北「郷土文学」の作家たちは、五・四新文学の影響を受けたばかりでなく、淪陷区の労働大衆の苦しみ、侵略者への反抗を目のあたりにしていたので、文学作品に勇敢で力強い美意識が湧き出ている。荒涼たる広大な東北大地を背景にして、色あせた太陽、悲鳴をあげる山鷹、真っ黒な雲と光る稲妻、吹雪のなかにぼつんと立っている木々などの描写を通じて、人々の心の悲壮ではあるが複雑な様態を呼びおこしている。

梁山丁の『緑の谷』では、「うなっている山風」という表現がしばしば登場する。この自然現象の描写には、作者の感情色彩がくわえられ、東北農民の象徴ともなっている。

五 梁山丁文学の特徴

山丁の文学は「郷土文学」を基調とし、「満洲文壇」において異彩を放っている。けれども、その歩みはけっして順調と言えるものではなかった。

一人の文学者として、祖国が外来者に侵略されることは、何よりも悲しかった。

山丁は「わたしと文芸―『山風』にかえて」²¹のなかで、当時の心境をこう語っている。

わたしの生活は滿洲事變にぶちこわされた。そこでわたしは、窒息した良心を携えて、田舎を流転し、また田舎から町へと流された。ハルビン駅で職を得たが、落ち着いたと思えば、今度は再び田舎に流転し、また田舎から町へと流されていった。：(中略)：五、六年の間、まるで帆のない船のように、町と田舎の間を漂流していた。何編か書いてみたが、あれはいずれもわたしが放浪中に見た平凡な町の物語と平凡な田舎の物語である。唯一の収穫は、聡明な友人を得たことだった。

多くの聡明な友人たちはだんだんと静かにわたしのそばから立ち去った。

多くの聡明な友人たちはだんだんと静かにわたしのそばから立ち去り、死んでいった。

目の前に繰り広げられたこの悲劇の場面は、わたしの良心をかみくだいていった。一九三五年と六年は本当に自分の言葉を失った。おそらくトルストイの「否定された芸術」と魯迅の「文芸無用論」の影響だろう。従来の創作意欲は完全に消え去ってしまった。

現実と向かいあい、自分の筆を折るしかないという精神的なダメージが大きかったに違いない。滿洲事變、事變後

の社会にもたらした恐怖、創作活動に対する政府の弾圧が感じられる。

だが、山丁は意気消沈してばかりではなかった。暗黒の現実を目にしたことは、かれの社会に対する反発を引き起こさせたのである。

第一の特徴は、下層社会に生活する人々、特に農民の生活を描き、中国社会の封建性と人々の貧困、愚昧さを暴いたことである。

梁山丁は独自の「郷土文学」の創作姿勢を堅持し続け、終始、下層社会に生きることを強いられた人々に目をむけた。かれらの貧しい暮らし、人生の苦しみ、運命への反発、と叫びを如実に描いた。ことに、侵略という特別な政治環境を意識し、人々の故郷に対する愛着、その土地に存在する人為的な圧迫、生活に追い込まれて匪賊となる、そういったさまざまなテーマを展開して、侵略によってもたらされた災難を暗示したのである。

梁山丁文学を見渡せば、農民を題材とした作品がほとんどであることに気づくだろう。

かれは『緑の谷』のあとがきに、次のように書いている。²²⁾ わたしは都会人の生活を送っているが、田舎でわたしともに暮らしてきた強靱さを備えた農民たちを忘れ

られない。わたしにとつては田舎暮らしに都会暮らしよりも親近感を覚える。わたしはかれらが祈りと嘆きの間に生きる道を求めているのをこの目で見ている。

満洲の生命を支えているのは農民たちである。社会の基礎となつているのも農民たちである。われわれはこの点をよく理解すべきである。

長編小説『緑の谷』は、地主林家の没落史を軸に、農民と地主の間の矛盾、農民と買弁ブルジョワジー、匪賊と地主の矛盾を描いた。

このほかに、『短編の』、『山風』、『孛生』、『壕』、『織機』も同様の題材をあつかった秀作である。

日本の侵略によつて、中国農民の暮らしは崩壊しつつあつた。土地を奪われ、農作物を低価格で買いつけられた。

土地を失つた人々は、地主の雇い人に強制されたのである。多くの内外の災難は、農民に一気にのしかかつてきた。

山丁は小説のなかで農民の生活を描きながら、社会に根づいていた封建的な盲目的服従や民族の劣等根性をも描いた。

『北極圏』では若い農民大青のことを描いた。女房は村の権力者に犯された。怒つた大青は、思わず「おれは人間だ！人間だ！一体どんな世の中だ！」と叫んでいた。しか

し、気の弱い大青は、怒りを涙にし、屈辱を呑みこんで沈黙してしまつた。まもなく、権力者は大青の女房を永遠に自分のものにするために、大青に無実の罪を着せて陥れる。大青は牢獄につながれた。大青は死ぬまで自分がどんな罪を犯したのかわからなかつた。そのままです黒い社会に呑みこまれていつてしまうのである。

『天のはてに伸びた大地』では、使用人の「独眼龍」が雇い主の楊四爺に搾取されながら、奴僕に甘んじる姿を描いた。匪賊（抗日ゲリラ）が襲つてきたときに、「独眼龍」は主人を守るために、匪賊と決死の戦いをした。主人は打たれて死んだが、自分が主人に代わつてその家の長になることを夢見ていた。だからかれは匪賊との戦いをやめなかつた。結局、主人と自分も同じような結末をたどり、死体を荒野にさらすはめになつた。

こうして中国農民に根づいている奴隷根性を、多くの小説を通じて痛烈に暴きだした。

山丁は常に下層社会の人々に深く同情し、かれらの日常を描写し、「満洲国」で生活しているかれらがいかに喘ぎ、もがいているかを訴えた。

『残缺者』は登場人物のいずれもが貧しい身体障害者であり、「満洲国」には、健康で完璧な人間は存在しないこ

とを暗示した作品である。

特徴の第二は、国内の暗黒を暴露するとともに、民族衝突を強調したことである。

小説『臭霧中』は、一四歳の少女秦子と義理の父親の悲しい運命を描いている。「一九三二年、外国の軍用ラッパを吹いて、馬に乗っている黄色い軍服を着た人たちが淘家岡に駐屯した」とある。読者は時代背景から容易に日本軍を思い浮かべることができる。軍隊が村に入ったその朝に、秦子の母は強姦されて死んだ。実の父親は原生林に逃げこんだ（山丁はいつも原生林や山への逃避を抗日ゲリラへの参加として暗示する）。最後に、機関車からでてきた黒くて、臭い煙のなかで、秦子親子も死んでいく。

貧しい人々の過酷な運命を描きながら、文面の随所に忍び寄る侵略者の魔の手を挿入している。

先にも触れたが、『孛生』もこうした日本の侵略と民族矛盾を提起している。

故郷を愛する老九婆一家と家を失った悲しみと怒りを通じて、占領下における郷愁と人々の貧しい暮らしが表現されている。

第三の特徴は、経済の崩壊を通じて、日本の侵略を強調したことである。日本の侵略による中国への経済的略奪を

暴きだしている。

山丁の小説では、日本は政治、軍事面における中国人民に対する鎮圧を描いた以外、経済面の略奪も非常に重視していた。

短編の『織機』では、中国の手織り工場が日本の新しい機械を導入した工場とそれに出資した銀行に追こまれ、倒産してしまう様子を題材にした。

『織機』はきわめて淡々とした筆致で、工場がどうにもならなくなり倒産してしまい、熟練工は転職を余儀なくされ、労働者たちが解雇されてしまう物語を描いていく。日本の経済侵略によって中国の手工業にもたらされた打撃を反映しているのである。

『山風』の題材は東北農村への経済侵略である。農民たちが苦勞して収穫した大豆を売りに行ったときに、外国商人と地元の闇組織にさんざん難癖をつけられ、かれらがいかに食料市場を独占したかを描写した。

『緑の谷』の経済侵略についての描写も有名である。出版前に、「作品に重大な問題がある」と、検閲に引っかけた。出版に際して、「問題のある箇所」はすべて削除されてしまった。たとえば以下の一節がそうである。

汽車は広大な平原から煙の充満する町に突き進んで

きた。汽車の怪獣のような吠え声は、町の春夢をぶちこわした。誰もが知っているが、この町を繁栄させた命脈は年々形を新たにしていくなかにある。汽車はこの大地で収穫された産物、掘りだされた鉱物を何千トン、何万トンともって行く。そのお返しは「親善」、「合作」、「共栄」、「提携」……

このような大胆な描写はついに筆禍を招くこととなり、山丁は故郷を追われるはめになる。

上記の削除された一節からわかるように、梁山丁の主張する「郷土文学」の核心は、「現実を描き、暗黒面を暴露する」ところにあった。

この創作姿勢はかれの一連の作品からも読みとることができる。いずれの作品も現実社会をありのままに表現している。現実主義の精神で、創作に臨むのが梁山丁の創作における最大の特徴だと言える。

六 おわりにかえて

梁山丁の「郷土文学」は、魯迅の「郷土文学」の影響を直接受けたばかりでなく、プロレタリア文学の影響も受けている。

梁山丁が「郷土文学」創作の道を選択したのは、東北が

淪陥されたという特殊な環境のもとで、現実主義文学の道を選択した結果である。

梁山丁と関わりの深い二回の文芸論争はいずれも、「郷土文学」の主張する「社会の現実に眼をむけるかどうか」を軸としていた。文芸グループの観点の分岐よりも、外来文学に対する文化的な対抗意識が強く感じられる。

厳しく複雑な情勢下に置かれた「満洲文壇」において、文芸論争を通じて文壇に派閥ができ、優れた作家と作品が誕生したことは、論争の大きな成果だと考えてよからう。

梁山丁、陳因、王秋螢、古丁、小松、爵青、疑遲、袁犀、関沫南らは「満洲文学史」では、永遠に語り継がれていくだろう。

二回の論争の間に、双方の主張にはかなり感情的なところもあったものの、文芸と現実、文芸と生活、文芸と政治、文芸と人民、のような実質的な問題に触れることができた。

今後、「満洲文学」の研究には、新しい資料の発掘とともに多角度からの柔軟な研究が必要だろう。たとえば、作品数をもっとも多く、芸術性の高い『芸文志』派の研究は、「満洲文学」を理解するうえで、一大突破口となるのではないだろうか。あまり研究の進んでいない『芸文志』派の文学が解明されれば、「満洲国」の一四四年間の実像を、文

芸の面からより鮮明に把握できるのではないかと思われる。

註

- ① 雑誌『明明』の回想② 疑遲（『地球の一点から』西田勝平和研究室編 一九九五年四月三〇日 三頁）
- ② 「東北淪陷期のいくつかの問題から 古丁を評す」李春燕（『古丁作品選』春風文芸出版社 一九九五年六月 六〇一頁）
- ③ 『東北現代文学大系』第一集 張毓茂主編 沈陽出版社 一九九六年二月 二〇一～二〇二頁
- ④ 『古丁作品選』春風文芸出版社 一九九五年六月 五二頁 註②と同じ。六〇二頁
- ⑤ 「東北淪陷期の郷土文学について」梁山丁（『文学信息』九一期 一九九二年一〇月二一日）
- ⑥ 『文最』第一號 文選刊行会 一九三九年 五頁
- ⑦ 「東北淪陷期の郷土文学について」梁山丁（『文学信息』九一期 一九九二年一〇月二一日）
- ⑧ 『東北現代文学大系』評論卷1 瀋陽出版社 一九九六年二月 三九六頁
- ⑨ 『古丁作品選』春風文芸出版社 一九九五年六月 八一頁
- ⑩ 「山丁論」馮為群、李春燕（『梁山丁研究資料』遼寧人民出版社陳荒煤主編 一九九六年四月 二九八頁）
- ⑪ 「われわれの文学の実体と方向」（『東北現代文学大系』評論卷1瀋陽出版社 一九九六年二月 三二九頁）
- ⑫ 「私と東北の郷土文学」（『梁山丁研究資料』遼寧人民出版社 陳荒煤主編 一九九六年四月 二三三頁）
- ⑬ 「郷土文学論と『緑の谷』出版前後」（『地球の一点から』西田勝平和研究室 第七六号 一九九五年三月 四頁）
- ⑭ 「『緑の谷』と郷土文学」（『梁山丁研究資料』遼寧人民出版社 陳荒煤主編 一九九六年四月 三四五頁）
- ⑮ 註⑬と同じ。二二九頁
- ⑯ 註⑬と同じ。二二七頁
- ⑰ 註⑬と同じ。二二七頁
- ⑱ 註⑬と同じ。二三四頁
- ⑲ 註⑬と同じ。二三三頁
- ⑳ 『満洲文藝年鑑』第一輯（G氏文学賞委員会 青木實編輯 昭和二二年九月 一八頁）
- ㉑ 『梁山丁研究資料』遼寧人民出版社 二一六～二二七頁
- ㉒ 註⑲と同じ。一九六頁

（本学助教 中国文学）